

おとたけ ひろただ

乙武洋匡さん × 武雄市長 樋渡啓祐

議論は巻き起こすもの

樋渡

乙武さんはテレビでもインターネットでも次から次に発言されていて、インターネットでも反発を受けることも多々あったりされているようで、僕はすごく親近感を感じていて…。

(会場大爆笑)

樋渡

みなさん、そこは笑うところではないです(笑)。あれだけ発言をポンポンされているので、そこはちよつと心配していました。

乙武

もちろん、何の配慮もなしに不用意に人を傷つける発言をして反発を受ける、というのはよくないと思います。ただ、僕や市長は、「本来はこうあるべき」と思うところがあり、それについて黙っていることができない

高橋

市長は当たり前にしたくないというのはありますか？

樋渡

例えばこの図書館。図書館はじつとしていなければなら

らない、休みが多いものだという既成概念。図書館は

こんなものなんだと誰もが言っていました。でも僕は自分が行きたい図書館を作りたいって思った。

効率とか考えたと提供者目線になりがちではありますが、そうではなく利用者目線に。それが本当の市民目線だし、市民価値を上げていくのです。そして議論が巻き起こる。図書館は自分たちのという意識が高まりますから。

聞こえない声を聴く

高橋

乙武さんは子ども達からのSOSを拾うために教員になられたとのことですが、やはり難しさはありましたか？

乙武

難しさは当然ありました。SOSの出し方って人それぞれ。不登校などの分かりやすいサインを出してくれる子もいれば、そつでない子もいる。それを1人も見逃さないように普段から意識して、実際見つけて、寄り添って、一緒に解決していく。

これは難しくもありましたが、本当にやりがいもあつてすごく充実していました。政治家という仕事も同じで、市民団体のような声の大きいところだけでなく、なかなか声を発することが出来ない人達のニーズをくみ取ってまちの総意を導き出していく仕事ですよ。こういったところが教育者という仕事と似ているのかなと思います。

乙武

僕は「全員をえこひいきする」という意識でいました。今はこの子が伸びるチャンスだから、今はこの子を優先させてくれ。その代わり、

次はこの子。その次は——特定の誰かに肩入れするのではなく、場面ごとにメリハリをつけ、最終的には担任している2年間で、結果的にみんなを伸ばしていく。でも中にはいるんですよ。児童名簿に正の字を書いて

樋渡

まず、すべてを見るなんて

樋渡

僕も言われたことがあります。正の字書いて数えたのかつて(笑)。僕もそうなのですが、教育も政治もこうあらなければならぬという先入観から解放されなければいけません。

高橋

最後に、何を変えていくとこれから面白くなりますか？

乙武

まずは常識を疑ってみること。そして、みんなと同じじゃなきゃダメという考え方を変えることですね。あの人

は素晴らしいのになぜ自分とはとか考えがちですが、みんなそれぞれ得意なことあれば、苦手なこともある。「隣の芝は青く見える」という言葉がありますが、さらに僕が言いたいのは「隣の芝は青く見える、でも隣もウチの芝を青く見えている」ということ。結局みんな、お互い様、一長一短なんですよ。

乙武 洋匡 (おとたけ・ひろただ)

1976年、東京都生まれ。先天性四肢欠損。幼少時より電動車椅子にて生活。早稲田大学政治経済学部卒業。大学在学時に上梓した『五体不満足』が500万部を超すベストセラーに。3年間の小学校教員を経験した後、2013年2月に東京都教育委員就任。地域との結びつきを重視する「まちの保育園」運営にも携わる。2児の父。

コーディネーター 高橋聡

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
武雄市図書館プロジェクトリーダー

2月10日、武雄市図書館の文学・文芸書コーナーにて『乙武洋匡氏 × 樋渡市長講演会』が行われました。